

山梨県一の沢遺跡の縄文時代中期の植物圧痕

中山誠二（山梨県立博物館）

1 遺跡の概要と分析資料

一の沢遺跡は、甲府盆地南東部の御坂山地と曾根丘陵が接する尾根状の標高420m地点に位置する。尾根は山裾より北西方向に向かって穏やかに傾斜し、東側には狐川が北流する。

遺跡調査の結果、縄文時代前期後葉住居址5軒、中期中葉住居址9軒、中期後葉住居址12軒、中期末葉住居址1軒、後期前葉住居址1軒のほか、中期を中心とする土坑100基以上が検出され、同時代中期を中心とした大規模集落であることが明らかにされている（山梨県教育委員会 1986、1988、1989、境川村教育委員会 1989）。

本調査では、遺跡から出土した縄文時代中期の土器を肉眼観察により抽出し、圧痕が付着しているとみられる17点の土器についてレプリカ作成、圧痕観察を行った（第1図）。

2 試料の分析方法

本調査では、縄文土器の表面に残された圧痕の凹部にシリコーン樹脂を流し込んで型取りし、そのレプリカを走査電子顕微鏡（SEM）で観察する「レプリカ法」と呼ばれる手法を用いる（丑野・田川 1991）。

作業は、①圧痕をもつ土器試料の選定、②土器の洗浄、③資料化のため写真撮影、④圧痕部分のマイクロスコープでの観察、⑤圧痕部分に離型剤を塗布し、シリコーン樹脂の充填、⑥これを乾燥させ、圧痕レプリカを土器から転写・離脱、⑦圧痕レプリカを走査電子顕微鏡用の試料台に載せて固定、⑧蒸着後、走査電子顕微鏡（日本FEI製Quanta600）を用いて転写したレプリカ試料の表面観察、⑨現生試料との比較による植物の同定という手順で実施した。

なお、離型剤にはアクリル樹脂（パラロイドB-72）をアセトンで薄めた5%溶液を用い、印象剤には歯科用印象剤JMシリコーンを使用した。

3 同定結果（表1、第2図）

ICH06（第2図1～7）

波状口縁を持つ深鉢形土器で、口縁下に沈線文や隆帶文、地文に縄文を施す。胴部外面から圧痕が検出された。

圧痕は、長さ5.0mm、幅3.2mm、厚さ3.8mmの端部が丸みを持つ俵形を呈する。端部に種瘤が認められる。臍部分は、やや窪んで欠損しており、臍構造が確認できない。表皮は平滑であるが一部に筋状のしわが見られる。形状、大きさ、種瘤の存在から、アズキ（*Vigna angularis*）と判断した。

ICH08（第2図8～11）

隆帶文をもつ土器片で、胴部外面から圧痕が検出された。

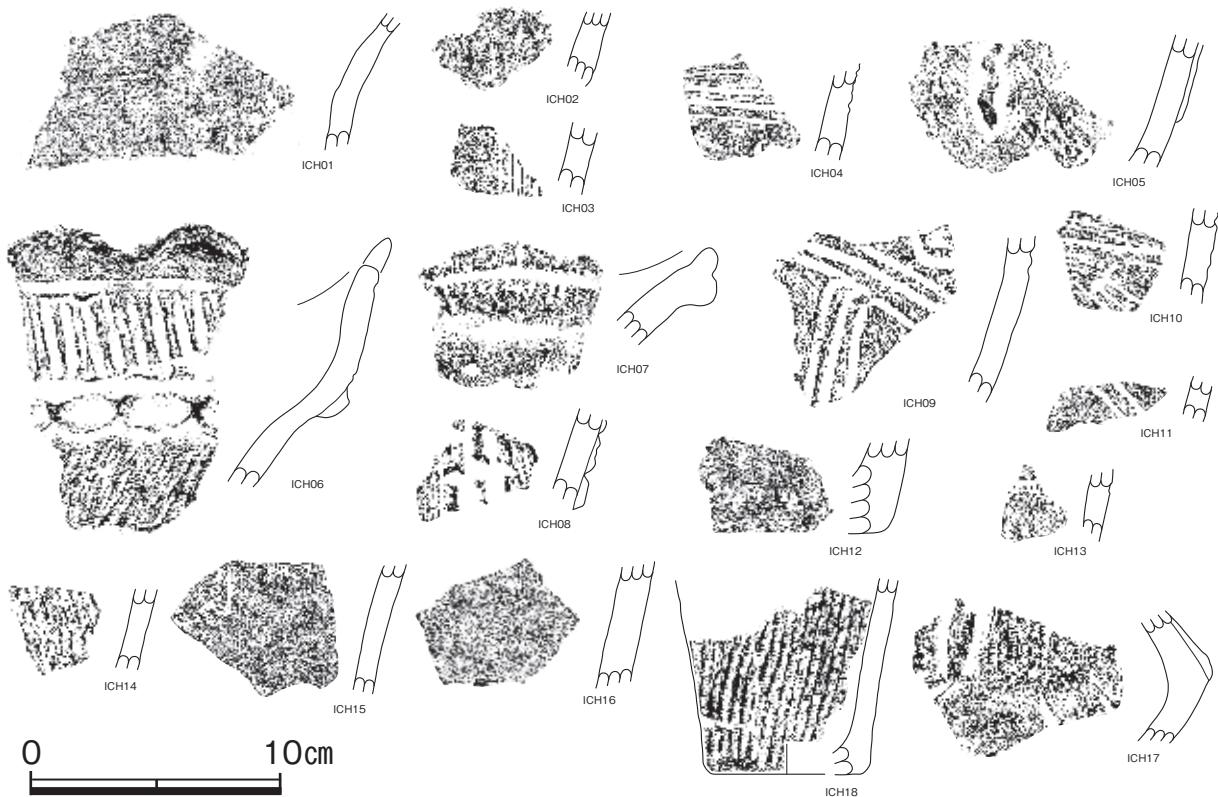
圧痕は、長さ4.0mm、幅2.0mm、厚さ2.1mmの扁平な橢円形を呈する。マメ科種實に類似するが、同定の鍵となる特徴が見られず不明種とした。

ICH10（第2図12～15）

沈線文をもつ土器胴部破片。外面に圧痕が確認された。

圧痕は、長さ2.1mm、幅2.0mm、厚さ1.8mmで、平面形が偏円形を呈し、側面がイチジク状となる。網状の隆線が外皮全体を覆うが、臍（着点）は確認できない。大きさ、形態や表皮の特徴からシソ属近似種（cf. *Perilla*）とした。

4 小結



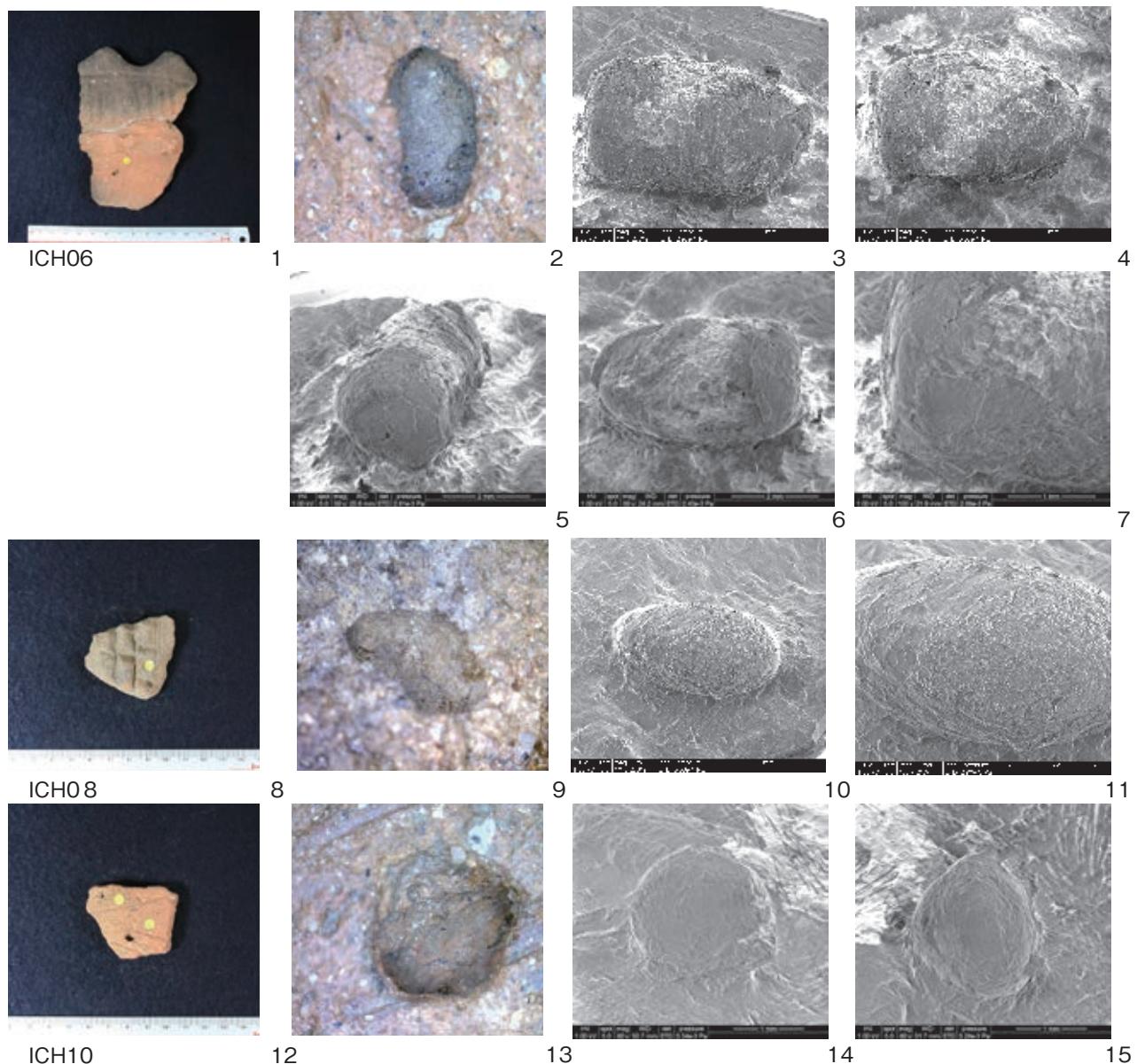
第1図 一の沢遺跡圧痕土器

表1 一の沢遺跡圧痕一覧

番号	試料名	時代	時期	型式名	土器の部位	植物圧痕の有無	植物同定
1	ICH01	縄文時代	中期		深鉢 脊部	×	
2	ICH02	縄文時代	中期		深鉢 脊部	×	
3	ICH03	縄文時代	中期		深鉢 脊部	×	
4	ICH04	縄文時代	中期		深鉢 脊部	×	
5	ICH05	縄文時代	中期後葉	曾利 I ~ II 式	深鉢 脊部	×	
6	ICH06	縄文時代	中期中葉	井戸尻式	深鉢 口縁部	○	アズキ (<i>Vigna angularis</i>)
7	ICH07	縄文時代	中期		深鉢 口縁部	×	
8	ICH08	縄文時代	中期中葉	井戸尻式	深鉢 脊部	○	不明種
9	ICH09	縄文時代	中期		深鉢 脊部	×	
10	ICH10	縄文時代	中期		深鉢 脊部	○	シソ属近似種 (cf. <i>Perilla</i>)
11	ICH11	縄文時代	中期		深鉢 脊部	×	
12	ICH12	縄文時代	中期		深鉢 脊部	×	
13	ICH13	縄文時代	中期		深鉢 脊部	×	
14	ICH14	縄文時代	中期		深鉢 脊部	×	
15	ICH15	縄文時代	中期		深鉢 脊部	×	
16	ICH16	縄文時代	中期中葉	井戸尻式	深鉢 脊部・底部	×	
17	ICH17	縄文時代	中期中葉	井戸尻式	深鉢 脊部	×	

一の沢遺跡の植物圧痕を調査した結果、アズキ (*Vigna angularis*) 1点、シソ属近似種 (cf. *Perilla*) 1点、不明種 1点が確認された。

甲府盆地東部地域の縄文時代中期にも、アズキやシソ属などの植物が利用されていることが判明した。マメ科、シソ科植物の組み合わせは、同時期の八ヶ岳・茅ヶ岳山麓地域にも共通する構成である点は注目する必要がある。しかしながら、釈迦堂遺跡を含め、本地域の検出数は極めて低い値で、八ヶ岳山麓地域とは対照的な印象をもつ。低出現率の傾向が、動植物の希少性や利用率の低さを示すものかどうかの判断は、圧痕が残される意味性にも関わっており、短絡的な判断はできない。少なくとも、定性的ではあるがアズキ、シソ属がこの地域にも認められることをまず評価しておきたい。



第2図 一の沢遺跡土器圧痕

土器写真：1.8.12

圧痕実体顕微鏡写真：2.9.13

圧痕 SEM 画像：3~7.10.11.14.15

引用文献

- 山梨県教育委員会 1986 『一の沢西遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第 16 集
- 山梨県教育委員会 1988 『一の沢北遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第 33 集
- 山梨県教育委員会 1989 『一の沢遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第 42 集
- 境川村教育委員会 1989 『一の沢・金山遺跡』 境川村埋蔵文化財調査報告書第 4 輯